

教育学部 学校教育教員養成課程 令和7年度「大学入門ゼミ」実施報告書

松下 幸司（教育学部附属教職支援開発センター）

（1）実施の概要

令和7年度の大学入門ゼミは、昨年度同様6クラス編成（1クラスあたり学生数：28名×5クラス+29名×1クラス）で実施した。教育学部学校教育教員養成課程においては、1～6組の授業教室が前期「大学入門ゼミ」のみならず、後期実施の「教職概論」（学部実地教育科目）までを通して“ホームルーム教室”となるよう、講義室調整を行っている。併せて、担任教員の学生指導のクラス間連携を図るとともに、学生にも初年次教育の一体感・一貫性を感じさせるため、ホームルーム教室となる講義室を、中庭を取り囲む4・5号館2階に、クラス番号順に並ぶよう集中配置して実施している（1組421→2組422→3組423→4組526→5組525→6組523）。また6クラスの偶数編成とすることで、1・2組、3・4組、5・6組の2クラスを「ペア学級」とし、弾力的な学習活動と学生指導ができるよう工夫した。（なお、指導体制としては、各クラス1名の主担任が主に学生指導を行い、2クラスに1名の副担任が2クラスの指導サポートを行う体制とし、教育学部1年次生全体を9名（+全体コーディネート1名）の教員が指導を担当することとしている。

併せて、受講生全員で授業を実施する授業回（表1参照）には、1年次生全員が415講義室に会して授業を行っているが、その授業回でも、自由座席で着席するのではなく、各組の座席位置をゾーニングで決め、所属組の座席ゾーンに着席するように指導している。これにより、組担任が組ごとに学生個々の出欠状況・授業中の学修状況を把握することができ、また必要に応じて、組ごとに学生指導や周知も可能である。

本学部学校教育教員養成課程における令和7年度前期「大学入門ゼミ」の授業計画については、4月14日実施の初回授業において、オリエンテーションとして学生に周知を行った。第1回授業では、事前にmoodle「大学入門ゼミ」コースページに授業計画のpdfファイルを掲載しておき、moodleへのアクセス方法を周知し、学生一人ひとりがアクセスすることによって、1年次生全員のmoodle閲覧スキルを確認した。

全学共通コンテンツについては、共通コンテンツに関連するミニ演習を円滑に実施・指導できるよう、一昨年度より実施体制に工夫を加え、415講義室で一斉授業を行い、2名教員がチーム・ティーチングで指導にあたることとした。1つの共通コンテンツを担当する2名の教員のうち、1名は前年度担当した教員が2年目担当を行い、残る1名は、本年度新たに「大学入門ゼミ」を担当する教員が担当指導を行う体制をとっている。これにより、2年目担当教員が初めて担当する教員に、共通コンテンツの内容や指導方法を伝達・共有（=伝承）することができる。すなわち、2年目の教員が主担当として全体指導にあたり、本年度初めて「大学入門ゼミ」を担当する教員が副担当として、学生の個別指導などにあたる方法である。令和2年度までは2名の教員が2つの別々の集団を指導する方法で実施していたが、このようなチーム・ティーチングで指導にあたることにより、2名の教員が別々に授業を実施する方法に比べ、1人ひとりの学生へのより細やかな対応・指導が可能となった。（415講義室で実施する全学共通コンテンツの授業において、ペア演習・グループ演習を行う際、例えば、北側半分の座席に座る学生にはA教員が、南側半分の学生にはB教員が机間巡視しながら取組状況を把握し、必要に応じて指導を行うという要領で、より細やかな対応・指導を行うよう配慮している。）併せて、令和4年度以降、当該年度に初めて「大学入門ゼミ」を担当する教員が、共通コンテンツの副担当として授業に関わることによって、「授業に参与しながら、共通コンテ

ンツの内容・指導方法を理解する」徒弟的な伝達・共有(=伝承)が可能になることを期待し実施している。

教育学部「大学入門ゼミ」における全学共通コンテンツについては、附属学校園訪問の日程調整との兼ね合いから、附属学校園訪問を挟むように表Ⅰの日程で実施した。特に「レポートの書き方」については、他科目授業、特に第1クオーター開講科目などにおいてレポート課題が多く出されることが想定される連休前に実施することとしている。

表Ⅰ 教育学部学校教育教員養成課程「大学入門ゼミ」 授業計画(実施分)

回	月・日(曜日)	授業内容の概要	
1	4月14日(月)	オリエンテーション(授業説明・moodle 設定と活用説明) 領域振り分け当初希望調査・進路志望当初調査・附属学校園訪問希望調査など 入学後約1週間の大学生活について	415講義室
2	4月21日(木)	小豆島一日研修 事前指導	415講義室
時間外	4月23日(水)3限目	教育学部1年次生「基盤カテスト」(13:00~/415講義室)	
3・4	4月26日(土)	小豆島一日研修(日帰り)	
・5	4月27日(日)	4/26(土) 2組・3組・6組 4/27(日) 1組・4組・5組	
6	4月28日(月)	[共通コンテンツ①] レポートの書き方	415講義室
7	5月12日(月)	[共通コンテンツ②] 日本語技法 + DRI①	415講義室
8	5月19日(月)	[共通コンテンツ③] 情報整理の方法 + DRI②	415講義室
9	5月26日(月)	(全体)学校園訪問 事前指導 (最終課題事前周知)「学校園を探究しよう」全体説明+ロイロノートの使い方 (組別)探究課題を設定しよう ~学校園訪問の注目点も含めて考えよう~	415講義室
10a	6月02日(月)	(選択)附属幼稚園訪問 ※附属中を訪問する受講生bは休講。	
11	6月09日(月)	[共通コンテンツ④] プレゼンテーションの方法	415講義室
10b	6月16日(月)	(選択)附属中学校 訪問 ※附属幼を訪問する受講生aは休講。	
12	6月23日(月)	(全員)附属小学校 訪問(1・5組:附坂小/2~4・6組:附高小)	
13	6月30日(月)	附属学校園訪問 成果交流+「学校園を探究しよう」情報整理 HR講義室	
休講	7月07日(月)	(授業時間外学習活動 集中取組日)「学校園探究」各自プレゼン作成・発表練習	
14	7月14日(月)	「学校園を探究しよう」中間報告会・発表練習	HR講義室
休講	7月21日(月祝)	(授業時間外学習活動 集中取組日)「学校園探究」各自プレゼン作成・発表練習	
15	7月28日(月)	「学校園を探究しよう」組交流・発表会 授業評価他	HR講義室

また、第9回(5/26)以降、前期後半の授業においては、「学校園を『探究』しよう」と銘打ち、受講生一人ひとりが、幼稚園・小学校・中学校に関する探究課題を設定し、文献調査・インターネット上の情報リサーチなどをふまえ、報告書にまとめ、プレゼン発表を行うという一連の学習活動を行った。この探究活動は、既習の共通コンテンツ①~④で得た知識・スキルを活用して取り組む学修機会として位置づけ、共通コンテンツを通して得た知識・スキルを「自分のものとして使える知識・スキル」に高めることを目指して実施した。(これらの探究活動については、2020年度、大学入門ゼミ

FDとしてオンライン授業公開を行った授業をベースに、さらに改善を重ね実施している。)

教育学部においては、moodle・zoom 等とは異なる「授業支援システム」を、学生が授業において活用しながら受講することができるよう整備をすすめている。これは、GIGA スクール構想により 2020 年度以降、全国の国立・公立・私立の小・中・高等学校に整備されているタブレット端末とともに、授業において活用するために整備されている「授業支援システム」と同様の環境である。教師を目指す上で、現在全国の学校に整備されている授業支援システムを 1・2 年次のうちに「自らが活用して学ぶ」経験を通して、3・4 年次で「授業で活用して指導することができる教員」としてのスキルを高めることを、教員養成における指導に位置付けることが重要だと考える。本年度も継続して、この授業支援システムを、共通コンテンツ①～④で得た知識・スキルを活用して取り組む学習活動「学校園を『探究』しよう」において活用することとした。

(2) 学生アンケート(共通コンテンツアンケート)結果についての所見・今後の課題

平成 26 年度の学生アンケートに、レポートの書き方をもっと早く実施してもらいたいとの希望が多くなったことから、平成 27 年度以降、それまでの実施タイミングから 1か月ほど前倒し、大学入門ゼミ前半、特に、クオーター制の導入もふまえ、「レポートの書き方」については、必ず連休前に取り扱うこととしている。

共通コンテンツ「レポートの書き方」に関して、学生アンケートには、「高校のときはレポートを書く機会がなかなかなくて、書き方に困ったので、「レポートの書き方」のスキルを学べてよかったです。」「レポートと感想文の違いから詳しく教えてくれたので、自分の中で違いが明確になってレポートを書きやすくなった。」「レポートについて不明な所ばかりだったので将来に役立つ力が養えてよかったです。」「配られた資料を参考にしながらレポートが作れるのでありがとうございます。」「レポートの書き方を学ぶことで、今後の大学生活への不安が薄くなかった。」「実際に自分で使っていけるように頑張りたい。」「レポートの書き方のスキル教育を受けるまで、自分で調べて試行錯誤しながらレポートを書いていた。しかし、授業を受けてから、レポートの正しい書き方やテンプレートを知ることができ、分かりやすく上手くまとめることができるレポートが増えた。」など、学生の必要感に応じたタイミングと内容による授業を提供できたものと捉えられる。

一方、「情報整理の方法」については、学生アンケートに「情報を整理する上で必要なことを知ることが出来た。」「要点と授業の流れを再現することの大切さを学ぶことができました。」「大学での講義は高校までと違ってパワーポイントの資料は配られた上で授業が行われているので、必要に応じてメモをとっていく必要があり、少し戸惑っていた部分がありました。大学の授業としてノートの取り方を説明してくれるのはありがたいです。」「情報整理を行うことによってレポートやプレゼンを作ることにもつながるため、将来のためになると考えたため受けて良かったと思った。」などの意見が、また「日本語技法」については「メールの正しい送り方を学べてよかったです。」「先生に送るメールの書き方を学べたことで、失礼がないように対応することができるようになった点」などをよかったですとして挙げている。

「プレゼンテーションの方法」については、「今まで学ぶ機会がなかったため、大学生活だけでなく、社会人になっても学んだことを活用できそうなことがよかったです。」「説得力のある話し方やプレゼンテーションの方法など、大学生活だけでなく、今後の働く中でも生かせることを学ぶことができた。」との、今後の大学生活・社会人としての生活にも繋がるスキルアップができたとの意見が寄せられた。また、「プレゼンテーションの方法に関する授業が面白かった。実際に有名な

プレゼンを見ることでわかりやすかった。」との意見もあった。元 Apple 最高経営責任者 スティーブ・ジョブズの製品発表動画を視聴した上で、「スティーブ・ジョブズのプレゼンテーションから技法を学ぶ」という担当教員の授業展開の工夫がもたらした学生の意見と推察される。その一方、「これから丁寧に説明されたことでプレゼンテーションを作れるようになった。」との意見も寄せられた。『学生の目指す理想像』を具体的・視覚的に示すことと併せて、要点を押さえた、スマールステップでのスキルアップを図る手法も、学生にとって受け止めやすく、学習効果の高い方法だと受け止めることができる。

併せて、第9回の授業以降の『学校園を探究しよう』を通して、「プレゼンの方法やレポートの書き方など、これから絶対に必要になることについて学ぶことができて、実際に発表なども経験することができたので良かった。」と、知識・スキルについて『教えられる』だけでなく、その後、知識・スキルを自分の必要に応じて『活用する』という演習設定の流れが、スキル向上・定着に寄与する可能性について、学生から意見が寄せられている。本事例を参考に、今後とも引き続き、大学生として基礎的な知識・技能の定着に向けた授業実施における工夫改善を重ねたい。

総じて、高校生までとは異なる“大学生としての学び方”のスキルアップの基礎を、4回の共通コンテンツの授業を通して培うことができたとともに、自分でできる達成感を感じながら不安感を解消し、将来に繋がるスキルとしての価値づけを促すことができたと思われる。

(3) 継続すべき事項 ~学生の適切な学習環境の確保のために~

教育学部学校教育教員養成課程において実施している「大学入門ゼミ」は、これまで毎年度、415講義室において全体指導を行ってきた。全体指導を415講義室で行うことによって、180名を超える1年次学生にあまねく視線を向けることができることに加え、複数教員が同時に学生指導にあたることによって、受講生一人ひとりの学習状況に目が行き届き、より細やかな個別指導ができるメリットがある。また、415講義室で全体授業を実施することによって、学年全体での一斉指導の後、講義室や座席を移動することなく(415講義室ではクラス別指定座席制で授業を実施している)、クラス単位で指導を行ったり、グループやペアでの演習を行ったりした上で、改めて学年全体での一斉指導を行うなど、足並みを揃えて授業を進行することができるというように、授業運営上もメリットを多く挙げることができる。併せて、415講義室は学生机1席に対し1個の電源が整備されており、入学時に1人1台の購入を求めていたパソコン端末を入学直後の「大学入門ゼミ」においても電源の不安なく積極的に活用し、パソコン端末や情報ネットワークの活用による快適な学習環境を学生に提供することができる。

(ここから、昨年度初回授業において発生した講義室トラブルについて、備忘録として、また今後継続した学習環境の確保のために、記しておくこととする。) 2024年度も2023年度までと同様、同じ講義室にて授業実施する旨、2023年度内に担当事務に上申していたものの、2024年度初回授業日の授業準備時に415講義室が他講義で使用されることになったと伝えられた。8:30(授業開始前20分)の時点で180名を超える学生が収容できる講義室の確保に奔走したが、開いている講義室は無く、811・822講義室に学生を誘導し、zoom接続して全体指導を行うこととなった。しかし、zoom通信が途中停滞するなど、満足のいく初回授業とはならなかった。初年次生の学習意欲・学習姿勢を削ぐことに繋がらぬよう、教育学部「大学入門ゼミ」の円滑実施のための適切な学習環境の確保に対し、関係各署の皆様に、2023年度まで同様のご助力を引き続き賜ることができるように、この場を借りて強くお願ひ申し上げたところである。

本年度（2025年度）については、教育学部1年次生「大学入門ゼミ」指導担当教員の415講義室使用のねらい・必要性をご理解いただくとともに、修学支援課の皆様・学務係教育学部担当の皆様の連携協働をいただき、2023年度までと同様、415講義室にて、前期「大学入門ゼミ」を無事実施することができた。この場をお借りして関係各位に御礼申し上げるとともに、次年度も継続して415講義室で実りある「大学入門ゼミ」を実施したく、お願い申し上げるところである。

大学入門ゼミ実施報告書(法学部)

I. 実施の概要

本年度の大学入門ゼミは、8 クラス開講し、1 クラスあたり約 20 名の規模で実施した。担当教員は、青木丈、岸野薰、金宗郁、辻上佳輝、鶴園裕基、横井里保、溝渕彰、山本陽一の 8 名である。

教員の割当については、専門分野の偏りが生じないよう配慮しながら毎年度調整を行い、キャンパスアドバイザー(CA)制度との連動を図ることで、学生が 3 年次の専門演習に配属されるまでの期間、入門ゼミ担当教員が継続的に面談等の支援を行う体制を整えている。

入門ゼミの構成は、「情報整理の方法」「日本語技法①②」「レポートの書き方」「プレゼンテーションの方法」といった共通コンテンツを扱う部分と、各担当教員の専門領域に即した個別指導を行う部分に大別される。共通コンテンツは各教員のシラバスにも記載しており、概ね第 1 Q 期間の演習で体系的に教育している。

法学部独自の取組としては、法学部資料室(法学部棟 3 階)および香川大学図書館の利用方法に関する解説を実施している。法学・政治学の学修において文献資料の検索・収集技能は不可欠であり、初年次段階でこれを習得させることを企図している。

また、全受講生を対象とした講演会として、5 月 20 日 3 時限にかがわ被害者支援センター支援局長伊藤好美氏による「犯罪防止の啓発について～被害者にも加害者にもならないように～」をテーマとした講演、および 6 月 10 日 3 時限に香川県消費生活センター副主幹井上秀基氏による「消費生活相談の現状～消費者として知っておきたい知識～」をテーマとした講演を開催し、規範意識と倫理観の涵養、消費者トラブルへの対処法についての理解促進を図った。

2. 学生アンケート(共通コンテンツについてのアンケート)結果についての所見

共通コンテンツに対する学生の評価は全体として良好である。特に「レポートの書き方」については、参考文献の引用方法や論理的な文章構成など、アカデミック・ライティングの基礎を習得できたことを評価する意見が多数見られた。「プレゼンテーションの方法」についても、グループ発表を通じて実践的に学べたことを肯定的に評価する声が多かった。

他方で、演習時間の不足、プレゼンテーション実践機会の少なさ、より具体的な指導を求める声など、改善を望む意見も一定数認められた。また、クラス間での授業内容や課題量の差異について懸念を示す意見も複数見られた。共通コンテンツの質保証を図りつつも、各教員の創意工夫を活かした少人数教育の利点を損なわないバランスが求められる。

3. 教員アンケート結果(または反省会での意見交換)についての所見

教員アンケートからは、共通コンテンツの意義は認識されつつも、実施方法や教育効果について多様な見解が示されている。各コンテンツの内容を限られた授業時間で教えることの困難さ、AI時代における情報収集手法の転換の必要性などが指摘されている。教育効果については、基礎的学力の底上げが図られているとの肯定的評価がある一方で、入門ゼミで学んだ内容が上位年次で定着しない問題が指摘されており、カリキュラ

ム全体での継続的な訓練の必要性が示唆されている。また、「発表するべきコンテンツを持っていないのに、発表の技術だけは学びたいという要望に表面的に応えてしまうことは、大学の初年次教育においては大きなマイナスだと思う」との厳しい指摘もあった。大学教育でのインプットのほとんどない新入生に対してアウトプットをさせる教育を行うことの是非を検討する必要があるかもしれない。生成AIの利用方法については、学部として共通の指導内容を定めておらず、各教員が独自に対応している現状が明らかとなった。

4. 改善すべき点等

法学部の特性として、論理的な文章作成能力を涵養することの重要性が指摘されている。近年はスマートフォンの普及に伴い PC の利用頻度が相対的に減少し、学生の文章構成能力や表現力が全般的に低下している傾向も観察される。

かかる現状を踏まえ、PC 必携化、DRI 教育といった新たな教育環境の変化に対応した内容の充実が求められる。特に一般的な生成 AI(ChatGPT 等)やカスタム AI(Gamma[プレゼンテーション資料作成 AI] 等)への対応については、現状では担当者の個別判断に委ねられており、指導内容が区々となっている。これは学生に混乱を招くおそれがあるため、学部または全学として統一的な指針を示すことが必要である。こうした点も考慮に入れた新たな『大学入門ゼミハンドブック』の制作を検討していただきたい。

大学入門ゼミ実施報告書(経済学部)

I. 実施の概要

令和7年度の経済学部の開講数は昼間13クラスで、担当教員数は各クラス1名の13名で実施した。昨年度から、入学時に将来の所属希望コースにもとづいてグループ分け(経済・政策分析、会計・ファイナンス、経営・イノベーション、観光・地域振興、グローバル社会経済の5グループ)を行い、1クラスに1グループを割り当てた。クラスごとに人数の多少が生じているが、グループの人数でクラス数も調整したため、極端な偏りはなかった。主担当コース以外のクラスを担当できず、副担当コースの学生を担当する教員も2名だけであった。

経済学部では例年1月に大学入門ゼミ担当者全員で打ち合わせを行い、共通シラバスの確認、共通コンテンツの内容や、15回のスケジュールのすり合わせなどについて話し合いの場を設けた。ほぼ例年と同じ方針であるが以下のことについて確認した。1) 共通コンテンツの教え方は各クラスの担当教員に任せているが、「レポートの提出(1回以上)」「PPTを使ったプレゼンテーション(1回以上)」「教員へのメール送信」を最低限行い、それらを成績評価に反映させる。2) 成績がクラスによって偏らないように配慮することとする(おおむね、優評価を基本とする)。また、今年度より授業のうちの1回をグループ活動として、栗林公園、日本銀行高松支店、アイパル香川などでの学外研修として割り当て、各グループの特色に応じた活動を行った。

2. 学生アンケート(共通コンテンツについてのアンケート)結果についての所見

学生アンケートでは、「レポートやメールの書き方、パワーポイントの作成や発表から今後活かせるスキルを身につけることができた」といった意見や、「プレゼンテーションの基礎を学ぶことができ、これからの大学生活に役立つと思った」などといった意見があった。共通コンテンツの中でも、レポートの書き方、プレゼンテーションの方法、日本語技法に重点をおいていたこともあり、それらを言及する学生が多く、コメント内容も好意的なものであった。一方で日本語技法についての説明の時間が少なかった、プレゼンテーションの実例を見たかった、レポートの書き方を最初にやってほしかった(授業の課題レポートを提出した後だった)などの意見も見られた。ガイダンスやグループ活動が学期の最初に多くスケジュールされており、共通コンテンツに割り当てられた時間が短かったこと、遅かったが原因であると考える。

3. 教員アンケート結果(または反省会での意見交換)についての所見

教員アンケートの回答を読むと、「各回では、授業資料(スライド)による進行を基調としましたが、独自にグループワーク課題を追加設定し、受講生相互のコミュニケーション機会がより充実するよう工夫しました」「グループ選択をしているので、プレゼンのテーマなど教える内容をグループに即した内容にした。具体的には、観光グループ(昨年)では、旅行プランのプレゼン、経済グループ(今年)では、社会問題のプレゼンといったプレゼンのテーマを与えた。」など、各教員が共通コンテンツの教育方法について様々な工夫をしていることがわかる。

一方で、大学入門ゼミの教育効果について疑問をもっている教員もいた。「学部間で専門の内容が大きく異なるにもかかわらず、全学部の学生に統一的な内容を強制的に学習させることに疑問を感じる。学生は、大学入門ゼミが必修化されていることで、教員が学生に対して強い姿勢でできることができない(不可を付けられない)と高を括っているようであり、受講態度が悪い」、「学部によって様々な行事に出席させることをもって、大学入門ゼミの

出席分としてカウントしている。これは教師も学生も楽だが、実際、大学入門ゼミの回数が正味 10 回分くらいしかなく、教える内容が浅くなってしまうことは否めない。」との意見もあった。

4. 改善すべき点等

上記3の教育効果の疑問点に関して、共通コンテンツのほかに、学部の教育内容に応じて独自の工夫を取り入れるための時間の確保が必要だろうと思われる。すなわち行事の振替ではなく実質 15 回分の授業回数とそれに応じた教育内容（教員ごとの工夫）の充実が必要であるように思われる（しかし、実際に今より授業回数を増やせば、教員の負担も増えるので、現行のままでよいという意見もある）。

『大学入門ゼミハンドブック』についてはおおむね好評であった。例として以下のような教員アンケート回答を引用しておく。「『大学入門ゼミハンドブック』と授業資料（スライド）のおかげで円滑に進行することができました。前任校ではこのような資料は整備されておりませんでしたので、ご作成に携わられた関係の先生方・職員の方に敬意を表して感謝申し上げます。」

文責：水野（康）

大学入門ゼミ実施報告書 2025 年度(医学部・高橋弘雄)

I. 実施の概要

学生に対する希望調査により医学科学生(106名)を4ゼミ教員計6名で担当、看護学科と臨床心理学科の合同で両学科学生(85名)を3ゼミ教員計8名で担当した(医学部受講全学生数191名、前期全15コマ)。

	担当者	クラス規模
M(1) 医療材料としての核酸	栗原亮介	26人
M(2) 基礎医学研究とその応用	北田研人・RAHMAN MD ASADUR 野中康宏	27人
M(3) 医学研究における動物実験と動物倫理	伊藤日加瑠	26人
M(4) 生物学におけるアカデミックリテラシー	高橋弘雄	27人
M(5) 日本語の技法と情報倫理	藤井豊・原田さゆり・石井有美子	28人
M(6) 双方向学習のスキルアップ	市原多香子・渡邊久美・松本啓子	29人
M(7) アカデミックリテラシーと地域心理支援	橋本忠行・太田美里	28人

2. 学生アンケート(共通コンテンツについてのアンケート)結果についての所見

共通コンテンツに関する学生アンケートでは、レポートの書き方について学べて良かったという意見が多く見られた。大学入門ゼミ以外の講義でレポートを書く際に役立ったという回答や、今後レポートを書く機会が増えると思うのでとても良かったといった回答が多く、学生のニーズに合っていると感じる。また、プレゼンテーションの方法についても、肯定的な意見が多かった。パワーポイントを使ったプレゼン資料の作成や、実際にプレゼンテーションを行う機会を持てたことなどが、今後の大学生活に活きるという評価が多かった。日本語技法の中では、特にメールの書き方に関する好意的な意見が多く寄せられていた。これまで目上の人に対するフォーマルなメールを書く機会がない学生も多いためだと思われる。全体的に、共通コンテンツを学べて有益であったという意見が多く、アカデミックリテラシーの習熟という講義の目的は達成できていると感じた。

3. 教員アンケート結果(または反省会での意見交換)についての所見

学生アンケートの結果を踏まえて、共通コンテンツを教える効果を感じるという意見が複数寄せられていた。共通コンテンツを教える際の工夫として、配布資料を虫食いにする、授業の初めにアイスブレイクを行う、グループワークの時間を多く取る、など、学生が退屈しないための各教員の工夫が見られた。生成AIの利用法に関しては、メリットとデメリットの説明や、誤った情報を出力する危険性への注意喚起、生成AIのレポート作成への使用の是非をグループワークで話し合う、などの指導が行われていた。

4. 改善すべき点等(もしくは『大学入門ゼミハンドブック』についての意見)

大学入門ゼミハンドブックに関して、大変講義の参考になったという意見が複数あった。改善を希望する点としては、生成AIの利用法に関する指導例が、大学入門ゼミハンドブックにあるとよいという回答があった。また、講義中にリアルタイムで学生からアンケートを取るよい方法が知りたい、という意見があった。

I. 実施の概要

(1) 開講数

7 コース 17 クラス

(2) 担当者数

2025 年入学生 CA17 名

(3) クラス規模

20 名前後。一部コースや一部回ではクラス合同で実施することがあり、その場合は約 60~70 名。

(4) 実施概要

第 1 回は各クラス別(一部コースについてはコース別)にガイダンスを行い、第 2~5 回は大学生活を送るうえでの必要な知識を得る機会として、学部全体の共通コンテンツを実施した。実施スケジュールと概要は下記のとおりである(造形・メディアデザインコースのみ幸町キャンパスで実施、他 6 コースは林町キャンパスで実施)。

第 1 回 (4/16): ガイダンス 各コース、クラス別に対面実施

第 2 回 (4/23): ①図書館利用講習

林町はコース別にビデオコンテンツの視聴 幸町は中央図書館で実施

②キャリア教育 林町は 1 室対面、他の教室へ同時配信 幸町は別途配信

第 3 回 (4/30): 保健管理センターによる保健教育

林町はコース別に 2 限と 3 限に分かれて対面で実施 幸町には遠隔配信

第 4 回 (5/7): 香川県警(高松南署)による安全教育

林町はコース別に 2 限と 3 限に分かれて対面で実施 幸町には遠隔配信

第 5 回 (5/14): 令和 7 年度基盤力テスト コース別に教室に分かれて同時に実施

第 6 回~ 各コース・クラスに分かれて実施

第 2 回は各コースが主に所属するキャンパスの図書館の利用方法について学び、またキャリア教育として外部講師(株式会社マイナビ)を招聘して。

第 6 回以降は全学での共通コンテンツ(5 回分)の教授方法については各コース・クラスに一任した。そのため、各コース・クラスにおいて、例えば、連絡の習慣やファイル等のバックアップの習慣をつけるために専用のチームを立ち上げて運用するコースや、レポートやプレゼンテーションの教授において専門分野に寄せた内容としたコースがみられた。

(5) 担当教員間でのやりとりの仕方

今年度は 3 月 31 日までに第 5 回までの実施スケジュール案をとりまとめ、4 月 1 日に学部 CA にメールでアナウンスした。実施前日までの、教室や資料等にかかるアナウンスは、メールベースで連絡を取り合って調整した。実施当日は、ほとんどすべての回において遠隔配信を実施したため、適宜 Teams により連絡を取りつつ、極力接続不良等のエラーが生じないよう連携して実施した。

(6) 共通コンテンツ(主に第5回まで)実施における、取りまとめ側としての反省点

- 一部の教室のオーディオが全く動作しないことを把握できていおらず、最終的に対応はできたものの対応完了までの間、当該教室の学生は音声が聞き取りづらい状況におかれてしまった。
- 香川県警からの安全教育で、録画や画面共有、ファイルの移動ができず、遠隔配信においてスライドの共有にやや支障が出てしまった。

2. 学生アンケート(共通コンテンツについてのアンケート)結果についての所見

概ね、大学生活に必要な技術を学ぶことができた等、好意的に受け止められたと考える。特にレポートの書き方やプレゼンテーションの技法について、好評な意見が多くみられた。他には、「日本語技法」(メール文の作成方法)など、大学生活に限らず今後の社会生活におけるスキルの習得についての好意的な意見もみられた。また、一部のコースでは専門分野に寄せた内容(例: 建築・都市環境コースにおける CAD(設計図面作成ソフト)の使用方法、造形メディアデザインコースにおける各教員の研究内容紹介)が展開されており、これらの内容は学生からも好意的にとらえられている様子が伺えた。

課題点として、コンテンツの実施順に関する意見が散見された。例えば「すべてに共通することだが、入学したての時期にできれば授業を行っていただきたいかった。」「もう少し早めにレポートの書き方の授業があると初めての時に1人で困りながらレポートを作ることがないのかと思いました。」「だいぶ時間が経ってからレポートの書き方や先生方の紹介などがあったので、そこはもっと早い段階から知りたかったと思った。」(抜粋、一部匿名化のため編集)などの意見が挙げられており、特にレポートの書き方についてはもう少し早い回での実施を検討したほうが良いのではないかと考えられた。

3. 教員アンケート結果についての所見

共通コンテンツ、あるいはその資料として事前に準備頂いたものの内容が、その後の学修の実態に比較的即したものであり、そのまま、あるいはほとんどを活用できるとの意見が多く見られた。基本的には「(中略)あとは各教員のこの授業の使い方ではないでしょうか。これは学部、コース、そのときの学生の雰囲気で、決まったフォーマットではなく現場で対応すべき課題と思います。」

一方で、今後のカリキュラムや社会情勢に即して内容を再検討する必要性が指摘された。例えば、本学部では今年度よりチームワーキング演習がコース別に実施することとなったが、大学入門ゼミの一部と内容的に重複する。ただし、これはどちらかというと大学入門ゼミよりも他の科目(チームワーキング演習など)の内容を検討する必要があるものという指摘がみられた。また、「レポートの書き方の回で生成AIの内容を盛り込めばよかったですと反省している」といった意見がみられたことから、共通コンテンツとしても生成AIの使用について含めるべきではないかと考えられた。

4. 改善すべき点等

全体として、共通コンテンツの実施順については再考の余地があるように考えられた。例えば情報処理の方法(ノートテイキング)やレポートについてはもっと早く実施してほしいとの意見がみられた。

また、外部講師によって遠隔配信に支障が生じる可能性があることから、コースによってキャンパスが分かれる本学部については、2キャンパスにおける個別実施(=遠隔配信をしない方法)を含めた実施方法の再検討が必要であると考えられた。

令和7年度大学入門ゼミ実施報告書(農学部)

I. 実施の概要

農学部における大学入門ゼミの授業実施は、学生支援の観点(新入生に接する機会が多いことなど)から、2021年度より、新入生のアドバイザー教員(クラス担任)が担当する形態をとっている。令和7年度は、担当教員10名で、10クラス(A1~A10)体制で全15回分を実施した。また、「A1とA2」、「A3とA4」、「A5とA6」、「A7とA8」、「A9とA10」は、それぞれグループを構成し、各グループは農学部新入生のクラス分けと基本的に直結している。クラス構成およびクラス規模は、表1に記載した。また、教育効果を高めるため、内容に応じて、クラス単位またはグループ単位で授業を開講した。

表1: 令和7年度の農学部における大学入門ゼミ実施体制		
	クラス	受講学生数
第1グループ	A1	16
	A2	16
第2グループ	A3	16
	A4	16
第3グループ	A5	16
	A6	16
第4グループ	A7	17
	A8	16
第5グループ	A9	15
	A10	14

授業内容については、全学共通コンテンツ「日本語技法」、「情報整理の方法」、「レポートの書き方」、および「プレゼンテーションの方法」についての学修の後、各クラスの担当教員が提示するテーマに基づいて、「課題プレゼンテーションおよび討論」が実施された。また、その間、DRI 教育コンテンツのデザイン思考コンテンツの視聴も実施した。さらに、情報収集の一環として、図書館(農学部分館)訪問も実施した。その際は、図書館のご協力を得て、農学部分館におけるクイズラリー企画と共同した。

農学部では、上述の実施形態をとることから、毎年、担当者が変わる。そこで、次年度の担当者が決定後(シラバス作成前)に、実施部会委員会および担当教員間で、事前に会合をする場を設け、大学入門ゼミ実施部会委員から、大学入門ゼミの在り方、シラバス内容、実施方法、評価の方法などについて説明を行い、農学部内における情報共有を行った(また、不分明な箇所においては、大学入門ゼミ実施部会委員が隨時説明を行った)。

2. 学生アンケート(共通コンテンツについてのアンケート)結果についての所見

Q1) 上記のスキル教育を受けて良かった点は何ですか?について:

特に「プレゼンテーションの方法」および「レポートの書き方」について、大変勉強になったとの意見が、いずれのグループにおいても、かなりの部分を占めた。その主な理由としては、まず「プレゼンテーションの方法」に関しては、大学入学までに実際のプレゼンテーションおよびプレゼンテーション資料(スライド)を作成する機会が少なかったことが考えられた。次に、「レポートの書き方」に関しては、大学では各種レポートを作成する機会が多々あるが、これまでレポート作成の経験が少なく、レポートで書くべき内容について学べた点が大きいことによるものだと考えられた。また、プレゼンテーションやレポート作成に関する「情報整理」や「日本語技法」についても学べたことが良かったという意見もあった。

上述の他、「メールの書き方」について学ぶことができ良かったという意見も多く見られた。

Q2) 上記のスキル教育で授業に対して改善を望む点は何ですか?について:

「プレゼンテーションの方法」および「レポートの書き方」に対して、大変勉強になったとの意見が多い反面、それらの項目に対しての改善要求も多い傾向が見られた。具体的には、「プレゼンテーションについてもっと時間をかけて欲しい」や「プレゼンテーションに対する質問の仕方について」など、また、レポートについては、「早い時期に教えてほしい」や「大学ではレポート書く機会が多いので、レポートの書き方に時間をかけて欲しい」をなどの要望

があった。

Q3) その他としては：

今後の大学生活に対して参考になる授業であったとの感想が多く見られた。

3. 教員アンケート結果についての所見

Q1) 「全学共通コンテンツ」を教えてみて、考えたこと・感じたことについて：

「メールの書き方」に対する必要性の意見が多く見られた。また、大学で必要な「レポートの書き方」および「プレゼンテーションの方法」については、特に教育効果が高そうであるとの意見があった。また、本授業は学生の今後が左右されるくらい重要な科目であり、難しい講義であるとの意見もあった。

Q2) 「全学共通コンテンツ」を教える際の工夫について：

実践的な内容（レポート作成、メール添付、Moodle の使用など）にかける時間を増やしたとの意見があった。

Q3) 「大学入門ゼミハンドブック」についての意見：

大学入門ゼミハンドブックに対応するパワーポイント資料の改善についての意見があった。また、早目に情報提供してほしい旨の意見があった（授業に上手く反映できるようにするため）。

Q4) 「大学入門ゼミ」の教育効果について：

「メールの書き方」、「レポートの書き方」、「プレゼンテーションの方法」、「剽窃」などについて、教育効果は高いとの意見が多かった。しかしながら、卒業時の発表の段階ではそれができておらず、学生が修得するための工夫の必要性が考えられた。

Q5) 生成 AI の利用法について：

生成 AI の利用については学部共通の項目を用いては教えてはいないが、大学入門ゼミハンドブックの内容等を中心に、個別対応をしている。主な内容としては、AI に依存するとか、使われるような人間になるのではなく、正しい使い方、情報漏洩の危険性などについての指導を行なっている。また、グループによっては、「AI を活用したグループワーク」として、テーマ（班ごとに学生が自由設定。実際には学生にとって身近な芸能人やスポーツなど）を決めて Google Gemini や ChatGPT でテーマに関する情報を取得し、得られた情報の間違いや偏りを学生が見つけ出し、その原因や活用時の注意点を議論させ、それについて班ごとに簡単な発表をしてもらう取り組みも実施している。

4. 改善すべき点等

本授業は、大学生活においてたいへん有益な授業であるが、学んだことを卒論作成等に使えていない現状が見られる。そのため、受講生が授業内容を持続的に修得するための方法等についての改善が考えられた。また、生成 AI の利用は近年たいへん重要な項目となってきていることから、その内容についても引き続き教示していく必要性が考えられた。